

## 学級の定員は何人？

学級の定員は40人とは知りつつも、実際は学年によって違うような気がする…。  
「先生、来年は何クラスになるんですか？」と聞かれたとき、明確に答えられるためにも、1学級の定員の仕組みについて、知っておく必要があると思います。

### 1 国の標準は40人

文科省の定めでは、小学校1年は35人以下、その他の学年と中学校は40人以下を標準とする、となっています。しかし特別の定めがある場合は除くとあります。

特別の定めとは、都道府県が必要と認めれば、変えても構いませんよということなのです。

### 2 実際には、すべての都道府県で40人以下の弾力的な運用がなされています

平成13年度以降、文科省は、義務標準法の改正や、運用の弾力化等の制度改革を行い、都道府県の判断により、国の標準(40人)を下回る学級編制を設定することが可能となりました。その結果、全国の都道府県がこれを採用し、現在に至っています。

(1) 千葉県においては、現在、次のような基準を設定しています。

小学校1・2年	…	35人	以下学級
小学校3～6年	…	38人	以下学級
中学校1年	…	36人	以下学級
中学校2・3年	…	38人	以下学級

(ただし、小学校2年から6年、及び中学校の各学年がこの基準で行きたいという場合には、市教委から県への要望が必要とされています。)

(2) 特別支援関係では、次のような標準があります。

特別支援学級(小・中学校)	…	8人	以下学級
特別支援学校(小・中学校)	…	6人	以下学級
(重複障害は)		3人	以下学級)

(3) なぜ自由に学級定員を変えてはいけないのかというと、学級数が増えればそれだけ教師を多く確保する必要があります。しかし教師の給与を払うのは県なので、市町村教委は、県と相談し、同意を得なければならないということなのです。(同意学級数と言います)

さらに注意しなければならないのは、その次の年度で学級数が減ることがあらかじめ分かっている場合には、1年後に教師が余ってしまうので、1年契約の講師を採用しておく等の方法がとられます。

したがって何学級で行くかどうかは、数年先を見通して検討していく必要があるのです。

### 3 4月1日までは不安

次年度が何学級になるのかは、4月1日現在の学年の児童数や生徒数を予測して出しますが、ちょうど境目の微妙な人数の場合があります。

- (1) 例えば小学校2年生の学年の総数が38人だった場合、2年生の定数は35人なので、19人ずつの2学級編制なのですが、3年次にもこのまま2学級でいきたいところですが、3年生になったときには定員がちょうど38人になるので、1学級に減ってしまうということが起こります。

4月1日までにもう1人増えて39人になってくれれば、2学級のまなのですが、今後転入生の予定があるのか、はたまた転出予定があるのか、たった1人で学級数が変わってしまうので、3学期は学校も市教委も神経を使う時期です。

- (2) もう一つの例は、中学校2年生で、生徒総数が76人の、2学級の定員いっぱいスタートした後、年度途中で1人増えて、77人になってしまった場合、本来ならば3年次は3学級に増えるところですが、ここで問題が一つ、修学旅行です。

3年の1学期に行われる修学旅行のために、2年の3学期から準備が始まります。実行委員会の立ち上げや班別の見学コースの設定、役割分担の会議、部屋割り、バス座席割り等々、決めることがたくさんあります。これらのことがあるため、2年生から3年生に上がる時には、クラス替えをせずに、持ち上りの学校が多いのです。しかし3年次に学級が替わってしまうと、これらの準備が無駄になってしまいます。

ではどうするか、よくとられる方法としては、クラス替えはせずに、2学級のまま3年に上がることです。学校の実情を考慮して2学級として編制をすることになります。(1クラスが39人になっても、40人以内であればいいですよと文科省は言っているので、法令に違反するわけではありません。)

もう一つの方法としては、修学旅行が6月末頃に予定されている場合ならば、仮に4月に学級替えをしても、それからでも旅行の準備は間に合うと踏んだ場合です。

これはかなりのリスクを伴いますが、できないことではありません。いずれにしても、学級が増えた場合や減った場合のために、仮の学級編制を用意しておき、4月1日を待つことになります。

- 私の知っている学校で、3年次に上がるときに学級解体して、4月に修学旅行に行ったという学校がありましたが、その時の職員にあとで聞いてみると、「準備していたことが何もできなくて、ただ行っただけ。」と言っていました。学級も担任も替わり、生徒達は楽しめたのだろうかと思いました。

(当時は40人学級制で、柔軟な学級編制が認められていない時期でした。)

### 4 5月1日が確定日

4月の入学式や始業式に学級数が決まっても、正式には、5月1日が正式な確定日なのです。その訳は、「5月1日現在の学級数を元にして教職員の数を決める」という国の法律があるからです。(義務標準法という)

つまり4月に学級がスタートしても、それ以後人数が増えた場合、5月1日までに学級数を増やせば、増えた教員の分の予算は配当しますよ、逆に学級数を減らした場合には、教員の配当予算は5月1日以降減らしますよ、という意味なのです。

しかし現実問題として、4月に学級がスタートしているのに、途中で学級を解体するのは教育的ではなく、混乱を生じるとして、仮に5月1日までに生徒数の変動があっても学級数を変えることは避けています。その代わりに、いろいろな名目で教師を加配するという措置がとられています。

(指導方法工夫改善、児童生徒支援、通級指導、初任者研修指導者、小学校専科、外国人児童生徒等指導、主幹教諭、養護教諭、栄養教諭、事務職員等の加配)

📍 かつて私が勤めていた中学校で、入学式以後に新入生が増えて、6学級から7学級に増やさなければならないという状況になりました。しかし現実にはもう学級がスタートしているので、1学期はそのまま、2学期から替えることになりました。

いざ2学期にスタートした1年7組は、各学級から数人ずつ抽出された生徒で構成されたのです。「なぜオレなんだ。」「何で私なの?」という思いで生徒たちからは不満が噴出したようです。

もちろん、4月の学級編制の時点で6組案と7組案を作っていて、7組の生徒を1～6組に振り分けてスタートし、7組編制になった時点で各学級にいた7組候補者を抽出したというのは考えられるが、生徒にとって、せっかくできた人間関係が壊れるわけで、不満が出るのは当然のことでしょう。

しかし当時は学校のやることに文句を言う雰囲気は無く、保護者も騒ぎ立てることはありませんでした。ベテランの教師が7組の担任になって、混乱も無く1年生を終えようとしていました。通常ならば、1年から2年に上がるときに、学級替えがあるのですが、なぜかそのまま持ち上がりてしまいました。そして3年になっても学級は替わらず、結局3年間同じクラスで卒業を迎えてしまったのです。

なぜこのようなことになったのかは、未だに分かりません。私は当該の学年ではなく、ましてや初任の頃でしたので、知る由はありませんでした。今なら、こんなことをしようものなら大問題になり、保護者も騒ぐところですが、なぜか当時はもめませんでした。でも生徒達は、不満たらたらだったというのを聞いています。生徒ファーストを忘れてはいけないと思います。

## 5 1学級の標準の推移

昔の学級の定員はどうだったのか、国の標準の年次推移を振り返ってみましょう。自分が小・中学生だった頃は、定員が何人学級だったのかがこの一覧表で分かります。

	～昭33	34～	37～	39～	42～	49～	55～	平5～	13～	23～
小学校	60人	50人	45人		40人		(40)	(40)		
中学校	55人	50人	45人		40人		(40)	(40)		
高校	55人		50人	45人		40人				

- \* 昭和33年に義務標準法、昭和36年に高校標準法が制定されました。
- \* 平成13年度以降、都道府県の判断による弾力的運用が可能となる。
- \* 平成23年度以降、小学校1年生のみ35人、あとは40人定員。

## 6 学校規模の分類

文科省は、学校として適正な規模の学級数として、次のように定めています。  
 小・中学校ともに「12～18学級」、つまり小学校は、1学年が2～3学級で構成されている学校で、中学校は、1学年が4～6学級で構成されている学校になります。  
 ただし学校の設置主体は市町村なので、市町村によって分類が異なる場合があります。

	(1) 過小規模校	(2) 小規模校	(3) 適正規模校	(4) 大規模校	(5) 過大規模校
小学校	5学級以下	6～11学級	12～18学級	19～30学級	31学級以上
中学校	2学級以下	3～11学級	12～18学級	19～30学級	31学級以上

- (1) 過小規模校 … 全学年に学級を作ることができないため、複式学級や欠学年がある。クラス替えができない。教育上の課題が極めて大きい。中学校は専任の教科担任が配置できない。隣接校との統合を検討する必要がある。
- (2) 小規模校 … 学年が1学級となり、クラス替えができない学年がある。中学校は免許外指導の教科が生まれる可能性がある。スポーツのチームが組めず、部活動の数も限られる。教職員数が少ないため、一人当たりの校務の負担が重くなる。
- (3) 適正規模校 … 標準と考えられる規模の学校。(標準規模校ともいう)指導上課題のある児童生徒をクラス替えで分けることができる。中学校は専任の教科担任が配置できる。
- (4) 大規模校 … 各学年の学級数がやや多く、施設利用面から、教育活動に支障が生じる場合がある。同学年でもお互いの顔や名前を知らないなど、児童生徒間の人間関係が希薄になる。教職員が十分な共通理解を図ることが困難になる。学校の分離・新設の検討対象。
- (5) 過大規模校 … 教室不足のため、教育環境の充実や、生活空間の充実が必要。通学区域の変更、新設校の建設を検討する必要がある。

## 7 千葉県の学校規模の現状

では、千葉県の国公立小・中学校の学校規模の現状はどうなっているのでしょうか、前述の分類に当てはめて学校数を集計してみました。

(学級数は、特別支援学級を含む。令和元年版教育便覧)

	過小規模校	小規模校	適正規模校	大規模校	過大規模校	計
小学校	12校	250校	242校	244校	31校	779校
中学校	1校	154校	139校	80校	3校	377校

- \* 小学校で最も少なかった学校は、平岡小幽谷分校の2学級、児童数 12人でした。
- \* 中学校で最も少なかった学校は、西陵中の2学級、生徒数 23人でした。  
(西陵中は、令和2年3月31日をもって閉校し、4月1日に富士見中に統合予定です。)
- \* 小学校で最も多かった学校は、おおたかの森小の48学級、児童数 1454人でした。
- \* 中学校で最も多かった学校は、葛飾中の33学級、生徒数 1192人でした。

## 8 学級の人数は何人が適正か

では、1学級の適正な人数はどれぐらいがいいのか、「学校生活の満足度」、「学力の定着度」、「学習意欲」に関する、子どもの実態の調査資料を元に、私なりに、◎、○、△、×で分析してみました。

		15人以下	16～20人	21～25人	26～30人	31～35人	36人以上
小学校 2～3年	満足度	◎	○	○	◎	○	○
	定着度	◎	○	◎	○	○	△
	学習意欲	◎	◎	○	○	△	△
小学校 4～6年	満足度	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	定着度	◎	○	△	○	△	×
	学習意欲	◎	○	○	○	○	△
中学校	満足度	×	△	○	◎	○	○
	定着度	◎	◎	◎	△	△	×
	学習意欲	×	◎	○	◎	○	×

- \* 満足度については、小学校では、学級の人数の違いがあっても、ほぼ不満はないが、中学校では、15人以下の学級は不満が高いことが分かります。
- \* 学力の定着度については、小学校では、15人以下の学級で定着度が高いが、31人以上で定着度が低くなる傾向があります。  
中学校では、36人以上の学級では定着度が低くなる傾向があります。
- \* 学習意欲については、小2～小3は、31人以上の学級で意欲が低くなり、小4～小6では、36人以上の学級で意欲が低くなることが分かります。  
中学校では、15人以下の学級の場合と、36人以上の学級で意欲が低下することが分かります。
- \* これらの結果から、小学校の場合は、30人以下の学級なら最適といえ、中学校の場合は、21人～30人の学級が最適ではないかと思われます。ただしこれは子ども達の調査を元にしたものなので、教師から見てどうか、となるとまた違ってくると思います。

## 9 学級の規模の国際比較

小・中学校の1学級の児童・生徒数を国際比較するとどうでしょうか。OECDの調査では、各国の1学級の平均を比較していますが、ここでは、1学級の定員（上限）はどうなっているのかについて、比較してみたいと思います。（文部科学白書2011、他）

	学校種	基準		学校種	基準
日本	小学校	40人(上限)	フランス	地域レベルで児童数を決定	
	中学校	40人(上限)	ロシア		25人(上限)
アメリカ	1～3学年	24人(上限)	中国	小学校	45人(上限)
	4～8学年	29人(上限)		中学校	50人(上限)
イギリス	1～2学年	30人(上限)	韓国	小学校	23人(標準)
	3～6学年	基準なし		中学校	32人(標準)
ドイツ	1～4学年	30人(上限)	スイス		26人
	5～10学年	30人(上限)	シンガポール		40人
イタリア		25人(上限)	オーストラリア		30人

- \* これを見ると、世界の中では、日本は1学級の定員がいかに多いかがわかります。

● 私の中学時代、田舎の学校でしたから、1学年が2学級の規模でした。学校生活は普通に楽しめていたし、不便だと思ったこともありませんでした。こういうもんだと思っていましたから。ただ、サッカー部があったらサッカーをやっていたらろうなとは思いますが。

私が教師になった頃は、第2次ベビーブームで、生徒数が増え、学校規模がどんどん大きくなっていった頃でした。数年たって学年が11学級に膨らんだときには、私の受け持ちの学級が6学級でしたので、学年の半数は知らない生徒になってしまいました。廊下ですれ違っても、名前も知らないし、生徒たちも私と距離が遠かったと思います。やがて学校は荒れていきました。

学校として適正な規模は、学年すべての子どもの授業を担当できることや、体育は2学級合同で男女別を実施することから、偶数学級であること、子ども達にとっても、ある程度の人数がいて刺激があること、部活動の数もそろっていることなどを総合的に考えると、私の経験上、1学年6学級が適正かなと思っています。